

日本語の「ことがある」構文とテイル形

大浦 真 (京都大学 大学院文学研究科) *

1 はじめに

本論では、「することがある」という形式で反復の意味を持ち、「したことがある」という形式で完了の意味を持つ「ことがある」構文と、一般的な進行や結果状態を表す用法とは別に反復や完了の意味も持つテイル形との関係について議論を行う。

- (1) a. この路線のバスはよく { 遅れることがある / 遅れている }。
b. 健はこれまでに三度選挙に { 出たことがある / 出ている }。

(1a) では、「遅れることがある」であっても、「遅れている」であっても、ともに反復の意味を持ち、両者の間に大きな意味の違いは感じられない。また、(1b) でも、「出たことがある」であっても、「出ている」であっても、ともに過去の経験や完了の意味を持ち、両者の間に大きな意味の違いは感じられない。

これまでの研究では、両者の形式の間の意味の差異はあまり議論されてこなかった。しかし、実際には、両者の間には、反復の「することがある」や完了の「したことがある」は、単数回の出来事しか表すことができず、反復や完了のテイル形は、本質的には複数回の出来事を表すという違いがある。本論では、「時間のインターバル」の概念の中に新たに「単数のインターバル」と「複数のインターバル」という概念を導入し、「ことがある」構文は、その意味表示の中に単数のインターバルを導入することにより、単数回の出来事を表し、テイル形は、その意味表示の中に複数のインターバルを導入することにより、複数回の出来事を表すという違いがあるとい

うことを主張する。

2 「ことがある」構文とテイル形

本節では、先行研究に基づき「ことがある」構文とテイル形の用法を紹介した上で、両者の意味の比較を行う。

2.1 「ことがある」構文

「ことがある」は、動詞の基本形に接続し、「することがある」という形式になり、事態の起こる可能性、もしくは、繰り返しを表す。

- 「することがある」
 - 「事象の成立可能性の存在を述べている」(仁田, 1981, p.90)
- (2) 熟練した運転手でも事故を起こすことがある。
 - 「その事態がくり返し起こるという現在を含む状況を表わす」(寺村, 1984, p.215)
- (3) このバスは 20 分ぐらいおくれることがある

それに加えて、「ことがある」は動詞のタ形に接続し、「したことがある」という形式になり、過去の経験や完了の意味を表すこともできる。

- 「したことがある」(工藤, 1989)、(池田, 1996)
 - 「ある時点までの期間に少なくとも一度、その出来事がおこっていることを表わす。」(工藤, 1989, p.112)

2.2 テイル形の用法

日本語のテイル形には、その基本的な用法として、「動作や現象が継続していることを表わす場合」(寺村, 1984, p.125) と「ある過去 (以前) のできごと

* mohura@ling.bun.kyoto-u.ac.jp

が終わって、その結果がいまある状態として残っていることを表わす場合」(ibid.) とがあるとされている。

これらの基本的な用法とは別に、派生的な用法がいくつか存在する。一つは事態や出来事の繰り返しを表す用法である。本論では、以下この用法を「反復のテイル形」と呼ぶ。

- 反復のテイル形
 - 「現在の習慣」を表す用法 (4a)
 - 「集団としての現象の継続」を表す用法 (4b)
- (4) a. 父はこの頃 6 時前に起きている (寺村, 1984, p.129)
- b. アフリカでは、毎日数万人の人が食料不足のために死んでいる (寺村, 1984, p.131)

寺村 (1984) では、テイル形の用法として、上記の「現在の習慣」と「集団としての現象の継続」を別の用法として挙げているが、寺村自身、ともに事態を表す点の連続と捉えているので、反復、繰り返しという点から見れば、一つの用法といえる。

- (4a) は、「父が 6 時前に起きる」という事態の繰り返し。
- (4b) は、「A が死ぬ」「B が死ぬ」、... という異なる主体による事態の繰り返し。

また、テイル形には過去の事態を表す用法もある。以下本論ではこの用法を「完了のテイル形」と呼ぶ。

- 完了のテイル形
 - 「過去の事実を回想して、いわば頭の中に再現させるような用法」(寺村, 1984, p.126)
- (5) その年、東京には二度大雪が降っている。(ibid.)

2.3 「ことがある」構文とテイル形の比較

本節では、まず、「ことがある」構文と反復のテイル形の比較を行い、その後、「したことがある」

構文と完了のテイル形の比較を行う。

- (6) a. 健は毎日 3 時間勉強することがある。
b. 健は毎日 3 時間勉強している。

(6b) のテイル形は反復の意味で使うことができるが、(6a) の「することがある」の構文は、それと同じ意味で使うことはできない。(6a) は、(6b) の「繰り返して毎日勉強する」という意味にとることはできず、「(一年に一回、一週間ほど) 毎日 3 時間勉強するという行動をする」という意味になる。実際、(6b) の文に「一年に一回」を付けた (7b) は少し奇妙になるが、(6a) に「一年に一回」を付けた (7a) は自然である。

- (7) a. 一年に一回、健は毎日 3 時間勉強することがある。
b. ?一年に一回、健は毎日 3 時間勉強している。

したがって、「することがある」と反復のテイル形は、前者が単数回の出来事を表している、後者が複数回の出来事を表しているという違いがあるといえる。

次に、「したことがある」と完了のテイル形の差異について考察する。この両者の違いも同様に考えることができる。

- (8) a. 昨年この洞窟で多くの人が死んだことがある。
b. 昨年この洞窟で多くの人が死んでいる。

(8a) と (8b) は明確に意味が異なっている。(8b) は、「昨年の一年の間に、この洞窟で多くの人が死んだ」という意味になるが、(8a) は、「昨年この洞窟で同時に多くの人が死んだ」という意味になる。つまり、人が死ぬということが一年間に何度か起きたと考えられる (8b) に対して、(8a) は一回だけ多くの人が死ぬという出来事が起きたということになる。実際、(1b) の「三度選挙に」の代わりに「三度の選挙に」を使った (9a) は非文になる。

- (9) a.*健はこれまでに三度の選挙に出たことがある。

b. 健はこれまでに三度の選挙に出ている。

したがって、「したことがある」と完了のテイル形は、前者は単数回の出来事を表して、後者は複数回の出来事を表していると言える。

以上をまとめると、「ことがある」構文は単数回の出来事を表し、反復・完了のテイル形は複数回の出来事を表すということになる。ただし、完了のテイル形に関しては、(10)のように単数回の出来事を表すことができないというわけではない。この点に関しては、次節で述べる。

(10) 健はこれまでに一度だけ選挙に出ている。

また、複数回の出来事を出しているように見える(1)の「ことがある」構文はどのように説明されるのか。

- (11) a. この路線のバスはよく遅れることがある。
b. この路線のバスは遅れることがよくある。
c. 健はこれまでに三度選挙に出たことがある。
d. 健はこれまでに選挙に出たことが三度ある。

(11a)は(11b)のように、(11c)は(11d)のように、「よく」、もしくは、「三度」の位置を変えても意味は変わらない。これは、この「よく」と「三度」が「この路線のバスが遅れる」頻度、もしくは、「健がこれまでに選挙に出た」回数を数えているのではなく、文末の「ある」を修飾することにより、事態の存在の回数を数えているためであると考えられる。

3 時間のインターバルに基づく意味論

本節では、前節で述べた「ことがある」構文と反復・完了のテイル形の意味の差異について、Bennett and Partee (1978)で導入された「インターバル」という概念に基づき説明する。

インターバル I は、時間の集合 T に対して以下のように定義される。

(12) I が T のインターバルであるのは、 $I \subset T$ であり、任意の $t_1 \leq t_3$ となる $t_1, t_3 \in I$ に対して、

$t_1 \leq t_2 \leq t_3$ となる t_2 が存在すれば $t_2 \in I$ が成り立つ時、かつその時に限る。

つまり、インターバルとは、途中で途切れないある幅を持った時点の集まりである。その上で、動詞の指示対象を「その動詞が成り立つインターバルの集合」とする。

このインターバルの概念を用いると英語の進行形は以下のように意味を記述できる。つまり、 I を *John walks* が成り立つインターバル、 J を *John is walking* が成り立つインターバルとすると、

(13) $J \subset I$

が成り立つ。

また、反復・完了のテイル形の複数性を表すために、Link (1983)の複数性述語 $*P$ を導入する。これは、単数可算名詞 P に対して、形式的には「 P が成り立つ要素を全て含む最小の lattice」と定義される述語である。具体的には以下のようなものである。

(14) $P = \{\{a\}, \{b\}, \{c\}, \{d\}\}$ の時、

$*P = \{\{a\}, \{b\}, \{c\}, \{d\}, \{a, b\}, \{a, c\}, \{a, d\}, \{b, c\}, \{b, d\}, \{c, d\}, \{a, b, c\}, \{a, b, d\}, \{a, c, d\}, \{b, c, d\}, \{a, b, c, d\}\}$

定義から分かるように、 P の要素自体も $*P$ に含まれる。

本論では、大浦 (2005) に基づき、この複数性述語をインターバルに拡張する。つまり、動詞の指示対象であるインターバルの集合に対応する述語を P とし、その P に対して、 $*P$ を定める。すると、単一の動作を表す P に対して $*P$ は動作の繰り返しを表すことになる。以下本論では、 P が成り立つインターバルを「単数のインターバル」、 $*P$ が成り立つインターバルを「複数のインターバル」と呼ぶ。

この「単数のインターバル」/「複数のインターバル」という概念を用い、「ことがある」と反復・完了の「ている」の意味を表示すると、それぞれ、(15a)、および、(15b)のようになる。「ことがある」構文は単数回の出来事を表し、反復・完了のテイル形は複数回の出来事を表すということは、(15a)は P を用

い、(15b) は *P を用いるということで説明できる。

(15) a. [[ことがある]]: $\lambda P \lambda I \exists I'(P(I') \wedge I' \subseteq I)$

b. [[ている]]: $\lambda P \lambda I \exists I'(*P(I') \wedge I' = I)$

つまり、(15a) の「ことがある」では、「[P する] ことがある」、もしくは、「[P した] ことがある」という形式で考えると、P が成り立つインターバル I' は単数のインターバルであり、P が表す事態は単数回の出来事であることになる。また、(15b) の「ている」は、「P ている」の形式で考えると P が成り立つインターバル I' は複数のインターバルであり、P が表す事態は複数回の出来事であることになる。なお、(15b) は、論者が大浦 (2005) で提示したテイル形一般の意味表示として与えたものを反復・完了のテイル形に限定した形式になっている。

これを用いて、「することがある」の意味を計算したものが、(16a) で、「したことがある」の意味を計算したものが (16b) である。ここで、 t_s は発話時を表す。

(16) a. [[[P する] ことがある]]

= [[ことがある]] ([[する]] (P))

= $\lambda Q \lambda I \exists I'(Q(I') \wedge I' \subseteq I) (\lambda I (P(I) \wedge I \geq t_s))$

= $\lambda I \exists I' (P(I') \wedge I' \geq t_s \wedge I' \subseteq I)$

b. [[[P した] ことがある]]

= [[ことがある]] ([[した]] (P))

= $\lambda Q \lambda I \exists I'(Q(I') \wedge I' \subseteq I) (\lambda I (P(I) \wedge I < t_s))$

= $\lambda I \exists I' (P(I') \wedge I' < t_s \wedge I' \subseteq I)$

例えば、P を「毎日 3 時間勉強する」にすると、P(I') が成り立つ I' を含むインターバルで (6a) が成り立つことがいえる。P は単数性を持った述語なので、I' が複数のインターバルであるという解釈は出てこない。また、P を「この洞窟で多くの人が死ぬ」にすると、同様に P(I') が成り立つ I' を含むインターバルで (8a) が成り立つことがいえる。

なお、本論で導入したインターバルに対する複数性述語は、もともとの Link (1983) における複数性述語と同様に単数のインターバルもその要素として含まれることになる。したがって、完了のテイル形が複数のインターバルを対象としていても、(10) の

ような単一の出来事も表すことができる。

4 おわりに

本論では、日本語の「ことがある」構文と反復・完了のテイル形に関して、一見意味が同じように見えるが、本質的に、単数回の出来事を表すのか、複数回の出来事を表すのか、という点で違いがあるということを提示した。さらに、そのために「単数のインターバル」/「複数のインターバル」という概念を新たに導入し、両者の違いの表示を試みた。「ことができる」「ことになる」など「こと」を含む構文は他にもあり、さらなる精査が必要である。

参考文献

- Bennett, M. & Partee, B. H. (1978). *Toward the Logic of Tense and Aspect in English*. Indiana University Linguistics Club.
- 池田 英喜 (1996). 「経験をあらわす「シタコトガアル」について」. 『待兼山論叢 日本学編』, 30, 11–26.
- 工藤 真由美 (1989). 「現代日本語のパーフェクトをめぐって」. 言語学研究会 (編), 『ことばの科学』, 3 巻, pp. 53–118. むぎ書房.
- Link, G. (1983). The Logical Analysis of Plurals and Mass Terms: A Lattice-theoretical Approach. In R. Bäuerle, C. Schwarze, & A. von Stechow (Eds.), *Meaning, Use and the Interpretation of Language*, pp. 303–323. Walter de Gruyter & Co.
- 仁田 義雄 (1981). 「可能性・蓋然性を表わす擬似ムード」. 『国語と国文学』, 58(5), 88–102.
- 大浦 真 (2005). 「テイル形の質量名詞的な性質」. 『京都大学言語学研究』, 24.
- Portner, P. & Partee, B. H. (Eds.) (2002). *Formal Semantics: The Essential Readings*. Blackwell Publishing.
- 寺村 秀夫 (1984). 『日本語のシンタクスと意味』, II 巻. くろしお出版.